



New Leader Seminar 沖縄研修レポート



2019.6.22~24
JP労組信越地方本部

「本当の幸せ」

青くきれいな海

この海はどんな景色を見たのだろうか
爆弾が何発も打ちこまれ ほのおで包まれた町
そんな沖縄を見たのではないだろうか

緑あふれる大地

この大地はどんな声を聞いたのだろうか
けたたましい爆音 泣き叫ぶ幼子 兵士の声や銃声が入り乱れた戦場
そんな沖縄を聞いたのだろうか

青く澄みわたる空

この空はどんなことを思ったのだろうか
緑が消え町が消え希望の光を失った島 体が震え心も震えた
いくつもの尊い命が奪われたことを知り
そんな沖縄に涙したのだろうか

平成時代

私はこの世に生まれた
青くきれいな海 緑あふれる大地 青く澄みわたる空しか知らない私
海や大地や空が七十四年前 何を見て 何を聞き 何を思ったのか
知らない世代が増えている
体験したことはなくとも
戦争の悲さんさを決して繰り返してはいけないことを
伝え継いでいくことは今に生きる私たちの使命だ
二度と悲しい涙を流さないために
この島がこの国がこの世界が
幸せであるように

お金持ちになることや有名になることが幸せではない
家族と友達と笑い合える毎日こそが本当の幸せだ
未来に夢を持つことこそが最高の幸せだ

「命どう宝」

生きているから笑い合える
生きているから未来がある

令和時代

明日への希望を願う新しい時代が始まった
この幸せをいつまでも

第29回「児童・生徒の平和メッセージ」詩部門 小学生高学年の部

最優秀賞 糸満市立兼城小学校六年 山内玲奈さんの作品

沖縄県平和祈念資料館提供（沖平第145号 令和2年6月17日）

[2017-2018] ニューリーダーセミナー『沖縄研修』参加者

【長野】

小林 新二	(長野南支部)	瀬在 雅史	(長野南支部)
福田 哲也	(上小支部)	氣賀澤 勇	(上伊那支部)
村越 大輝	(下伊那支部)		

【新潟】

川上 雄太	(新潟支部)	前田 洋司	(新潟支部)
細谷 智行	(下越支部)	富樫 智徳	(下越支部)
渡部 克美	(新津支部)	皆川 隆幸	(西蒲原支部)
和田 正規	(新潟県央支部)	坂爪 真也	(新潟県央支部)
小泉 直喜	(新潟県央支部)	関 優一	(中越支部)
星野 ゆかり	(中越支部)	庭野 澄夫	(魚沼支部)
山内 由美	(魚沼支部)	秋山 学	(上越支部)
内山 弘子	(上越支部)		

※レポートは提出者分のみ、原文のまま掲載しています。

【地方本部】

花見 亮一 関川 武 五十嵐 隆 笠井 昌英 川上 大介

[2017-2018] ニューリーダーセミナー『沖縄研修』日程

2019年6月22日(土)	平和祈念公園・摩文仁ヶ丘・沖縄平和祈念資料館 ひめゆりの塔・ひめゆり平和資料館
2019年6月23日(日)	佐喜真美術館 糸数壕 2019 平和行動 I N 沖縄 沖縄地本との交流会開催
2019年6月24日(月)	旧海軍司令部壕 首里城



沖縄研修を終えて

長野南支部 小林 新二

2年間にわたるニューリーダーセミナーの総仕上げとして、沖縄研修に参加をさせていただきました。

この研修をとおして、沖縄の抱えている現状や過去の歴史に触れ、「戦争の過ちと恒久平和」について学び、感じてきました。

私は、一年前の第4回ニューリーダーセミナーで、6月23日の沖縄は「慰霊の日」ということを初めて知りました。私は今まで、戦争については、広島や長崎の原爆のことしか認識をしていませんでしたが、今回の研修で、広島や長崎の前に犠牲になっていた沖縄戦について学ぶことができました。

そして、何よりも6月23日「慰霊の日」に合わせて、沖縄を訪問することが出来たことに感謝いたします。

さて、現地のバスガイドさんの話の中で、『私は戦争を知らない世代だけど、無関係ではいられない。沖縄で生まれ育った人として、過去の歴史について知ることも大切』と話されていました。その言葉を聞いて、私は何か心の奥深くで考えさせられるものがありました。沖縄の地では、どんな戦争が繰り広げられていたのかと考えさせられました。

1日目の訪問先、平和祈念公園・摩文仁ヶ丘を見学しました。

沖縄戦最後の激戦地となった場所を訪れました。現在は公園として整備されており、とても海がきれいな場所ですが、当時は戦地から逃げ延びてきた多くの住民達が犠牲になった場所であることを知りました。



本土決戦に向けて少しでも日を稼ごうと降伏をすることも許されず、最後の一兵になるまで戦い続けなければならない状況の中で、戦争に関係ない住民達までもが、アメリカ軍の掃討作戦により、多くの犠牲者を出した場所であることを聞きました。なぜ、軍人でもない住民が犠牲にならなければならないのか。沖縄戦のような戦いが本土でも起こっていたかもしれないと聞いたとき、すごく心が痛みました。

ひめゆりの塔では、若い女学生達が学徒隊として昼夜、負傷兵の看護要員として従事していましたが、軍隊の撤退によって戦争に関係ない多くの女学生達までもが亡くなっています。軍隊の出した解散命令で戦争に関係ない多くの人達の命を守ることができなかったのか、ただただ本土決戦を遅らせるための駒に過ぎなかったのか疑問に思います。

このように沖縄戦では、戦争に関係ない住民達が命を守るために逃げていた壕での

犠牲者が沢山いることを知りました。沖縄のほぼ全域をアメリカ軍が支配しており、また壕の周辺も激しい砲撃にさらされていたため、壕から出ることはほとんど死を意味していました。壕での生活はすごく暗く臭いもすごく、食料もない状況の中で、いつアメリカ軍が攻めてきて命を奪われるか分からない過酷な状況を考えると、心が痛みます。戦争に関係ない多くの住民達を巻き込んだ沖縄戦。戦争は勝っても負けてもただただ犠牲を生むだけであると分かりました。

この沖縄研修では、さまざまな貴重な体験をさせていただきました。過去の歴史をしっかりと学び、未来に事実を伝えていかなければいけないと思いました。そして、二度と同じ過ちを繰り返さない平和な世の中であることを切に望みます。

最後に、沖縄研修を計画いただいた信越地方本部の皆様に感謝申し上げます。



2019.6.22
平和祈念公園



沖縄研修を終えて

長野南支部 瀬在 雅史

今回2年にわたるニューリーダーセミナーの総仕上げとして沖縄研修の機会を頂きました。訪れる前はイメージとしてリゾート地、観光の島 沖縄でしたが、もう一方の側面である国内で唯一地上戦が行われた戦争の地、慰霊の地、基地の島という現実を知り学ぶ事になり自分は沖縄戦について何も知らなかったと痛感しました。

初日に訪れた平和祈念公園、摩文仁の丘にて信濃之塔、新潟の塔、逡魂之塔に参拝。沖縄戦では20万人を超す人が亡くなり、軍人よりも弱者である一般住民のほうがはるかに多く犠牲になったそうです。

2日目に訪れた佐喜真美術館で館長の説明を聞きながら見た「沖縄戦の図」。昨日平和祈念資料館やひめゆりの塔で見た生々しい写真や映像は悲惨さを直接視覚に訴えてきたが、画家によって描かれた図は見れば見るほど想像力が働き地獄のような世界へ深く導いてくれた。人間は戦争を忘れてしまう、忘れたがる。人間が人間でなくなるのが戦争だ、と館長が言っていました。二度とこの悲惨な戦争を繰り返してはならないということが犠牲者に対しての弔いであると思いました。

系数アブチラガマでは野戦病院としても使われ暗闇の中、僅かな明かりの下で治療や手術が行われ、兵隊として役割が果たせなくなった者は見捨てられ多くの方が亡くなっていく中、女学生たちが懸命に従事していたとガイドさんから聞き涙が出ました。



夜には沖縄地本の方々との合同交流会もあり、改めて私たちにはどこ

に行っても仲間がいるのだと実感しました。戦争というと自分は広島、長崎を思い起こしますが、沖縄の人にとっては組織的戦闘が終結した6月23日という日は特別な日であり、本土の人とは認識に差があると聞きました。また、お互いの抱えている課題等を意見交換することができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

この研修でほんの一部ではあるが沖縄戦について学ぶ事が出来ました。多くの人に現地を訪れ同じ体験をしてほしいと思いますが、そう簡単には行けないとすると自分が見たこと聞いたことをどう伝えていくべきか真剣に考えるようになりました。

平和があってこそその私たちの職場、地域の活動であり今もなお沖縄が基地問題で苦しみ、決して戦争は過去のものではないという事を心に刻み自分ができる平和行動をしていきたいと思えます。

今回参加できなかった方々も含め二年間のセミナーを通して知り合えた仲間との関係を大切に、共にJP労組の活動を盛り上げていきたいと思えます。

私は、6月22日～24日ニューリーダーセミナー沖縄研修に参加させていただきました。約2年間の研修に参加し、最後の研修が沖縄研修というものであり、楽しみという気持ちを持ちつつ、沖縄の現状を学びたいという気持ちで参加いたしました。

1日目は、羽田空港発の日本航空に搭乗し那覇空港まで行きました。現地で中部国際空港組と合流し、そこからバス移動となりました。まず、最初の目的地である平和祈念公園・摩文仁の丘に向かいます。公園内には、沖縄戦で亡くなられたすべての方の氏名が刻まれた「平和の礎」、「平和祈念像」そして摩文仁の丘の上には戦没者墓苑や、府県団体の慰霊塔がありました。そして、資料館の中には沖縄戦関係実物資料、当時の写真が展示されていました。

平和祈念公園を後にし、続いての目的地、ひめゆりの塔に向かいました。ここには平和資料館が併設されており女学生たちの学園生活から、どのように戦争に突入し戦中にはどんな体験をし、戦争とはどういうものであったかが時系列に沿って展示されていました。外には沖縄陸軍病院第三外科が置かれた壕に慰霊碑があります。以上で1日目は終了し、国際通りにある鉄板焼きの店で夕食となりました。

2日目は、佐喜真美術館と糸数豪に行きました。美術館には、沖縄戦の様子が描かれた「沖縄戦の図」が展示されています。外に出て屋上に登ると普天間飛行場を見渡すことができました。天候が雨でなければさらに遠くまで見渡すことができかと思えます。その後、糸数豪へ移動し、ガイドさんの案内付きで地下に入り見学をしました。ガマの中は真っ暗であり鍾乳洞から水滴が滴りとても蒸し暑く感じました。あの中に半年以上もいたと思うと、非常に過酷な環境であったと思います。地面には人間の歯がたくさん落ちていたという話も聞きました。

そして昼食を取り午後は「平和行動 IN 那覇」に参加しました。第1部では島袋沖縄県知事公室基地対策課調査班長を講師に「他国地位協定調査について」をテーマに講演をいただきました。第2部では全員で黙祷を行い来賓の方たちからあいさつが行われ、最後に宮城千絵連合沖縄女性委員から平和アピールが読み上げられ集会を終了となりました。その後、那覇に戻り夕食は沖縄地本との交流会となりました。

最終日の3日目は、旧海軍司令豪と首里城に行きました。壕には手榴弾自決した時の破片のあとが当時のまま残されていたり、医療室や司令官室がありました。そして最後の目的地である首里城を見学し那覇空港に向かい沖縄をあとにしました。



私は、今回沖縄研修を経てあらためて戦争の悲惨さや戦争のことを知らない子ども達に平和に暮らせることの大切さを伝えていきたいと感じました。ともて充実したニューリーダーセミナー「沖縄研修」となりました。



2019.6.22
摩文仁ヶ丘



「沖縄研修」に参加して

上伊那支部 氣賀澤 勇

「南国沖縄研修」ということで、少し観光気分で参加しました。しかし、糸数アブチガマを見学したときに衝撃が走りました。現代のように電気・ガスが通っている訳ではなく、暗く狭い空間に避難してきた住民や負傷兵、600余りもの人が、数か月間もアメリカ兵に見つからないように身を潜めて生活し、この中で命を落として逝った大勢の人の事を思うと、やりきれない気持ちで一杯になりました。国の権力争いのために、関係のない大勢の住民や、当時「お国のために」と言う言葉に洗脳されていた兵士が犠牲になっており、得たものなど何一つない結果となり、「人を失った」という悲しみだけが残りました。

また、平和祈念資料館では、戦争当時の生活の様子が再現、もしくは実際の物品が展示されており、改めて悲惨な感じが感じられました。そして戦争を体験した方からの生々しい当時の状況が音声で流れており、今では想像もできない事が起こっていた事を衝動的に感じました。また、戦後74年もたち戦争を経験した人が少なくなってしまう、「生の言葉で伝える」ことが難しくなっている現状も聞きました。

今でも沖縄にはアメリカ基地があり、その目的が防衛のためでなく権力争いのために都合よく置かれているものであり、有事の際は攻撃拠点となり、また怖いのは被害拠点にもなります。もしそんな事になったらまた多くの犠牲者を出すこととなります。そんな事は許されません。



広島・長崎も一緒ですが、時がたつ事によって戦争の悲惨さが風化する事が一番怖いと思います。今私達がやらなければならない事は、私たちの子供に現状をしっかりと「見せて伝える」という事だと思います。今でも世界の中のどこかで戦争、テロ等権力争いが起こっています。戦う当人も、また巻き込まれる全く関係のない第三者も犠牲になっている現状があります。

この研修に参加して、今でこそ「観光都市沖縄」ですが、「戦争」と言う悲しい体験の上に立っている事を私たちは忘れてはいけません。平和である事の大切さ、その思いに少しでも応えられるために、日本国民の一人として、今できる事を、組合員として自覚を持ち行動して行きたいと思います。次回は子供に体験させたいと思っています。

沖縄研修で感じたこと

下伊那支部 村越 大輝

「沖縄県」と言われて思い浮かぶのは華やかなリゾートホテル、白い砂浜と綺麗な海、ちんすこう、シーサーくらいの言葉と、沖縄出身の芸能人や歌手のこと。行ったことも無かったから、沖縄のことを知ろうとしたことも当然ない。ただただテレビで報道される沖縄の基地問題等々を聞き流して、沖縄県って大変な所だな、と他人事に感じて今まで過ごしてきた。そんな中で新任執行委員になり、ニューリーダーセミナーの最後に沖縄に連れて行ってもらえることが待ち遠しかった。青い空、綺麗な海、賑やかな観光地、初めて行く沖縄に対する勝手な想像でワクワクしていた自分が、沖縄研修を終えた直後は深く悲しい気持ちでいっぱいだった。74年前のあの日、沖縄で何があったのかを肌で感じたからだ。



初日に訪れた「平和の礎」には戦没者の名前が刻まれているのだが、そのあまりの人数の多さに驚愕した。沖縄だけでこんなにも多くの方が犠牲になっていたなんて考えられなかったからだ。平和の礎に刻まれている人々がどのような最期を遂げたのか、あまりにも悲惨な事実が実際にあったことなんだと沖縄県平和祈念資料館が教えてくれた。全国各地から沖縄に集めら

れて地上戦で命を落とした兵隊、遂げた先で集団自決した人々、敵に捕まる前に家族をこの手で殺した方がいいと教え込まれ親に命を奪われた子どもたち。見学時間が短かったにも関わらず展示してある写真と、壁に書かれていた体験談を読むだけで沖縄線の酷さと恐ろしさを十分知ることができた。

そして翌日に訪れた糸数アブチラガマが今回の研修で一番心に刻まれた場所。前日に見学したひめゆりの塔は穴の中には入れなかったのが感情移入が難しかったが、ここでは実際に中に入り現地ガイドから耳を疑う話を聞いた。「600人の負傷兵で埋め尽くされ最悪な衛生環境であった。負傷した足や腕をのこぎりで切断していた。最後には動けない兵士たちは毒殺された。」この地獄から生きて出ることが出来た生存者の方の談話は自然と涙が出てくるほど悲しく、震えるほど恐ろしい話であった。食料も物資も無い、外に出れば砲弾の雨、どこにも逃げ場もない、まして敵に降伏さえも許されない、この世の地獄に巻き込まれた沖縄の人々のことを思うとやりきれない。

戦争を知らない世代が大多数を占めている今だからこそ、こうした研修を繰り返し続けてより多くの人に沖縄県の歴史を知ってもらいたい。そして今まだ沖縄が抱えている様々な問題を当事者では無い県外の自分たちが理解していくことが、長く苦しい

思いをしている沖縄県のためにできることではないだろうか。今回の研修で見て聞いて感じたことを、自分は一生忘れないだろう。



2019.6.22
沖縄平和祈念資料館



沖縄研修を終えての感想

新潟支部 川上 雄太

今回、2年間のニューリーダーセミナーの締め括りに、沖縄研修に6月22(土)～24日(月)に参加させていただきました。

この間、様々な執行委員としての勉強をさせていただき、今までわからなかった組織の仕組み、また、信越の他支部の仲間との交流を体験することができ、毎回とても楽しく、また興味深く参加させていただきました。その締めくくりでもある沖縄研修。私は高校の修学旅行と家族旅行の二回行ったことがあり、高校の時も戦争関連の場所を回ったはずでしたが、まったく記憶にない状態です……。ましてや大人になってからの沖縄なので、正直半分は観光気分での参加でした。

しかしながら、この「大人になってから」実際に感じるものは、すべてが想像をこえるものでした。特に、「ガマ」での生々しい戦争の爪痕とガイドの方の話を目の当たりにし、現地の人達と話を聞いたりすることで、戦争の生々しさや悲惨さ、そして何より沖縄の人達の受けてきた境遇に心が痛みました。テレビで戦争のドキュメンタリーなどが放送されて



いる時は必ずと言っていいほど試聴し、日本でどのようなことが起こっていたかもある程度は理解していたつもりでした。ですが、沖縄を本土決戦に備えてのただ時間稼ぎの場所として戦っていた、またその勝利を信じてどんな過酷な状況でも懸命に生きようとしていた当時の沖縄にいた一人一人の気持ちを思うだけで胸が苦しくなります。それでも、テレビなどではわからなかった戦争後の沖縄の成り立ちを知ることが出来たのもとても興味深かったです。アメリカの文化が入ってきたことによるめまぐるしい発展が、今の沖縄の基盤になっているような気がしました。だからといって、基地問題を蔑ろにしてはいけないんだなと言う強い思いを肌で感じ、沖縄の方達は真剣に平和について考えているんだなと感じました。

私は、東京に観光などに行く際は時間があれば靖国神社に参拝します。それは、右だとか左だとかの思想云々ではなく、今日の平和な日々を送れるのは先人たちがいてこそその平和だと思っているからです。自分の考えがすべてではありませんが、そういった穏やかな精神をもって様々な交渉事を進めてほしいなと思っていたのですが、沖縄の人たちがそのような考えを持ってない意味を今回の研修で肌で感じる事ができ、また理解することもできた気がします。

これから未来のある自分の息子や若者にしっかりと平和のありがたみを感じてもらえるよう、自分ができることを真剣に考えていきたいと思います。

沖縄研修を通じての感想

新潟支部 前田 洋司

今回、2年間のニューリーダーセミナーの締め括りに、私自身も初めての「沖縄研修」に6月22日（土）～24日（月）に参加させていただきました。

正直、行く前までは、遊び気分がほとんどで、沖縄についてもテレビを通じての、浅はかな知識しかなく、基地移設問題にしても

「何故、日本にアメリカの基地があるのだろうか？」

という事に違和感を感じていましたが、外交下手な日本だし、立場は対等だと表向きは言っても敗戦国だし、北朝鮮などの牽制にもなるし仕方ないのだろうかという認識ぐらいしかもっていませんでした。

でも実際に沖縄に行き、ひめゆりの塔や、がまなど生々しい戦争の爪痕を目の当たりにし、沖縄現地の人達と話を聞いたりすることで、戦争の生々しさや、悲惨さ、そして何より沖縄の人達の受けてきた境遇に何より心が痛みました。



戦争で唯一、地上戦が行われた事も知りませんでしたし、残っている資料や映像を見てもとても日本で起きた事とは思えないものばかりでした。

僕が知る戦争は原爆や空襲など人が生で殺し合うものでなく、沖縄地上戦のように人と人が生で殺し合いを行う光景は、僕が知っていた戦争とはまるで違うものでした。そんな痛みを知る沖縄の人達だから、その歴史を真剣に後世に伝えていこうと言う強い

思いを肌で感じ、真剣に平和について考えているんだなと感じました。

幸いな事に本土の我々は、その痛みをまぬがれる事ができたので、やはり沖縄の人達が受けた痛みは本当の意味で解かってあげられないんだと思います。

それなのに、その痛みをもつ沖縄に何故、基地を作るのか？

何故、沖縄じゃなきゃだめなのか？

私には理解できません。

これからは沖縄の痛みを少しでも教えてもらった者として、少しでも世の中が平和になるよう、沖縄から基地がなくなるように願い、自分に出来ることを少しでもやっていきたいと思います。

今回の研修で初めて沖縄県に行きました。沖縄といえば、青い空に青い海、そして観光地といった印象が強かったのですが、今回の研修を通して沖縄県の現状、戦争の悲惨さ、残酷さ、沖縄の方々の思いを知り、胸が締め付けられました。私自身、同じ日本という国にしながら、何も知らずに生活していたことが情けなくもあり、また恒久平和というものを考えるきっかけになりました。

2泊3日した中で、戦争関連の場所を六ヶ所見学しました。その中でも「平和祈念公園」「ひめゆりの塔」「糸数アブチラガマ」の三つがとても印象に残っています。見学をしながらも沖縄では信じられないことが起きていたのだと実感しました。

平和祈念公園では、慰霊塔の数々、一人一人の名前が刻まれた平和の礎、そして、資料館で沖縄戦の写真、当時の証言や文章を目の当たりにすると、戦争の悲惨さや残酷さ、住民の方々の思いを知り悲しくなりました。



ひめゆりの塔では、看護要員として動員された学徒たちの戦場での実態、解散命令後の学徒たち、一人一人の顔写真、戦争のせつなさを感じ

ました。後世に戦争の愚かさや命の大切さを伝える為にも見学出来てよかったです。

糸数アブチラガマは、戦争当時そのままに残されていて、中は懐中電灯のひかりを消すと真っ暗闇になり、この厳しい環境の中で生活し、いかに苦しみや恐怖、絶望感を感じていたかを実際に肌で感じ取ることができました。また、ガイドの方の話にも聞き入ってしまい、戦争というものが改めて怖くなりました。また、他の見学場所でも、戦争というものは愚かであると改めて考えさせられました。

日本で唯一地上戦の行われた沖縄の地、20 数万人もの尊い命が奪われた沖縄戦、米軍基地・施設の約7割がある沖縄県、戦争がもたらした惨劇を後世に伝え、恒久平和の実現に向けての運動が大切であることを知りました。そして、少しでも平和に向けて協力していきたいと思えます。

今回、この沖縄研修に参加させていただき、平和という事を考えさせられ、大変勉強になり、私自身ステップアップできたと思えます。6月23日という一日が特別な日になりました。参加できよかったです。

「命どう宝」

今回、一番印象に残った言葉です。



2019.6.22
ひめゆりの塔
ひめゆり平和資料館



「沖縄に行って来た」と言うと、周りから羨ましがられることが多いが、今回の研修で訪問したところは、戦争に関係した場所がほとんどで、戦争がもたらした爪痕が色濃く残っており、観光気分ではいられなかった。ただ、私の住んでいる地域にはそういう場所はほとんどなく、戦争について学べる機会もほとんどないように思う。今回の研修は、観光客で賑わう沖縄の忘れてはならない闇の部分を知る大変貴重なものとなった。

3日間で多くの施設を訪れたが、やはりそこには戦争の悲惨さ、残酷さを物語る文書や写真や映像などが残されており、74年前、間違いなくこの地では戦争があり、多くの方が死んでいったのだと強く実感させられた。沖縄戦では日本側の戦没者は約19万人であるが、軍人よりも住民の方の死者が多いということが、他の戦争とは大きく異なる。米軍の攻撃で亡くなった人もいれば、日本軍の命令で自決した(いわゆる集団死)人も多数いた。また不当な扱いを受け、拷問・虐殺された住民もいた。日本軍はアメリカ軍と戦うために沖縄に来たのであって、沖縄県民の命を守るために来たのではない、と思い知らされた住民の心境は、絶望以外になかったのかもしれない。そもそも、もっと早く降伏していれば、これほどの犠牲者は出ていないはずである。



そこには「本土防衛のため、時間稼ぎのために沖縄は捨て石となれ」との国の命令があり、軍も当時の軍事思想・国家意識・皇室崇拝には逆らうことができなかつたのではないだろうかと思う。

終戦から70年以上経過しているが、戦時中あれほどの犠牲を払ったのに、沖縄では今もなお被害を受け続けている人々、場所がある。米軍基地があるがゆえに、問題は解決せず、事件・

事故は後を絶えない。沖縄はアメリカではなく、日本のものである。沖縄に基地をつくるな！ではなく、日本に基地を作るな！と国民全体が声を上げなければならない。

最近、米大統領が「安保条約は不平等だ」と発言している。安倍総理は次の参院選で何としてでも勝利し、改憲を強く望んでいる。安保条約の見直し、憲法改正で日本は戦争ができる国になる、と解釈するのは早いかもしれないが、近づくことには間違いない。そうならないためにも、私たちにできることは、国の間違いに対して「NO」と言える人間を国会に送り出すこと。つまり、小沢まさひとを当選させることが、平和を守ることになるのである。

今回、ニューリーダー養成セミナーのお陰で沖縄に行かせていただき、とても感謝致しております。3日間にわたる研修でした。天気は3日間とも曇りや雨で、沖縄の太陽を1度も見る事はありませんでしたが、私にとっては初めての沖縄は見るもの全て新鮮でした。

平和学習で訪れた平和祈念公園の『平和の礎』は、これまでテレビでしか見た事がなかったのですが、戦没者の名前が刻まれた碑が累々と立ち並ぶ光景を実際に目の当たりにして、「沖縄だけでも、これほど多くの人たちが戦いで死んでしまったのか。」と実感する事が出来ました。そして摩文仁ヶ丘から眺めた海。この海に70数年前、米軍艦船が海を埋め尽くす様にひしめいていたのかと想像すると、何とも言えない気持ちになりました。

次に訪れた『ひめゆりの塔』は、想像していた感じとは全く違う様相をしていました。ぽっかりと口を開けた病院壕の入口部分を見て、中はどんな感じになっているのだろうと思いましたが、実際に壕の中を体験する機会を2日目に与えていただきました。



2日目に見学した『糸数アブチラガマ』は、想像を絶する場所でした。物凄く狭く急こう配な入口を、天井に頭をぶつけながら下りていきました。天然洞穴の壕の中は天井から落ちてくるしずくと湿気で、生活環境としてはとても悪いというか、私はここでの生活は耐えられないと感じました。そんな過酷な環境の下でも、生き残るためには中で居なければならなかったのだから、沖縄戦に遭った人たちの苦労は筆舌に尽くしがたいものだったに違いないと思いました。同じ壕でも、3日目に見学した『旧海軍司令部壕』はアブチラガマと比べれば整備された作りの壕でしたが、環境はやはり良いとは言えず、長期生活は私には無理だと感じました。内部の部屋に、当時の幕僚たちが自決した際の手榴弾跡などが、当時のまま生々しく残されているのは衝撃でした。

どの戦争遺構を見学しても思うのが、過去にそこで人が実際に戦ったり亡くなったりと、多くの犠牲を払いました。今こうして戦いのない時代に生きられる私たちは幸せであるし、それは過去の多大なる犠牲の上に成り立っているという事も忘れてはいけなと思っています。戦争で亡くなってしまった軍人や民間人の方々に「日本は良い国になりましたよ！」と胸張って言える様な世の中を作るのが、現代に生きる私たちの役目だと思っています。



沖縄研修に参加して

西蒲原支部 皆川 隆幸

ニューリーダーセミナー「沖縄研修」に参加して、平和とは何か、というものを考えるきっかけになりました。最初の訪問地の平和祈念公園には、沖縄の方にとって大切な慰霊の日である6月23日の前日であったからか、多くの方々が訪れていました。先の戦争で犠牲となった方々の名前が刻み込まれた平和の礎を参拝し、続いて新潟の塔、信濃の塔、そして私たちの先輩方の御霊が祀られている通魂の塔を参拝しました。ここに祀られている方々に敬意を示し、これからも戦争は絶対に起こしてはならない、という思いを強くしました。

2日目に訪れた宜野湾市の佐喜真美術館の屋上からは世界一危険な基地と言われ



る普天間飛行場を見ることが出来ました。この日は雨が降っていたからなのか、米軍機が飛行している様子は見えませんでした。ただフェンス一つで仕切られたその向こう側に軍用機が飛行している中で日常生活を営まなくてはならない沖縄の方々のことを考えると、早くこの危険な基地をなくしていかなければならないと思いました。いま、普天間基地の移転先として名護市辺野古地区で新しい基地が

作られようとしています。沖縄の方々が望むのは、基地を減らしていくことであり、決して新しく作ることはないと思います。平和を守るために米軍基地があり、それが抑止力となって日本が守られている、という事実もあるのかもしれませんが、沖縄の方々にとって、基地があるせいでいつ他国の戦争に巻き込まれるかもしれない、市街地を飛行する軍用機がいつ墜落するもわからない、という不安を常に抱えながら生活せざるをえない状況に、基地が近くにない私たちにとって、とても申し訳ない気持ちになりました。

今回の平和研修で戦争の悲惨さ、命の大切さ、尊さを改めて感じました。戦争中のような、住民同士で殺しあったり、自ら崖から飛び降りたり、今では考えられないような状況におかれ、死んでいった話を聞き、二度と戦争を起こしてはいけない気持ちが強くなりました。私たちが普段生活をしている今のこの状況が平和であり、将来にわたって永久に続いていくことを切に願います。私は実際に戦争を体験したことの無い世代に生まれていますが、実際に当時使っていたアブチラガマへ入って当時の暗闇を体験し、話を聞き、考えさせられました。この先、戦争を知らない世代が増えていきますが、絶対に戦争を起こしてはいけないと言い続けていくことが、私たちの使命だと感じました。

沖縄研修の感想

新潟県央支部 坂爪 真也

6月22日から6月24日までの3日間ニューリーダーセミナー最終第8回として、沖縄研修に行ってきた。沖縄に着いて始めに行った場所は平和祈念公園でした。平和祈念公園では各県の沖縄戦関係の慰霊の塔があり長野の塔と新潟の塔を見学しました。新潟の塔を見学していると、偶然にも新潟の塔の建設に関わった方にお会いして当時の話を伺う機会もあり貴重な話を聞くことが出来ました。慰霊の塔を見学した後、同公園内にある平和の礎を見学しました。この平和の礎には沖縄戦で亡くられた方の名前が国籍を問わず、また軍人、民間人の別なく刻まれていました。

平和祈念公園を見学した後は、ひめゆりの塔の見学に行きました。ひめゆりの塔ではまずひめゆり学徒隊の慰霊碑を見学し、ひめゆり平和祈念資料館の見学をしました。ひめゆり平和祈念資料館には、ひめゆり学徒隊の犠牲者の遺品や、ガス弾によって多くの犠牲者がでた伊原第三外科壕が実物大で再現



されており、ひめゆり学徒隊について学べる場となっています。沖縄研修初日は、平和祈念公園とひめゆりの塔を見学して終わりました。

沖縄研修2日目はまず、糸数アブチラガマの見学でした。ガマとは、沖縄県の沖縄本島南部に多く見られる自然洞窟。沖縄本島には約2000の石灰岩で形成された鍾乳洞があり、それらは沖縄方言でガマと呼ばれるそうです。糸数アブチラガマは、もともとは糸数集落の避難指定壕でしたが、日本軍の陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室となったそうです。ガマの見学ではガイドさんの説明を受けながら、ヘルメット、軍手、懐中電灯を装備のうえでの見学でした。ガマの中には当時使用されていた遺留品等がそのまま残されていて、当時のガマでの生活に少し触れられた気分になりました。ガマを後にした後は、連合主催の連合2019平和オキナワ集会に参加しました。

沖縄研修3日目は、旧海軍司令部壕の見学に行きました。旧海軍司令部壕は先日行ったガマとは違い人工物の装いでした。

2泊3日の沖縄研修では、テレビや学校の授業では伝わりきれない戦争の悲惨さ凄惨さを学ぶ良い経験になりました。この研修だけでは学びきれない事も多々あり、いっそう戦争について自分でも学びたい気持ちです。戦争があった事実はけっして風化してはいけないものだし、同じような悲劇はけっして繰り返してはいけない事を再認識出来た研修でした。



沖縄研修を終えて

新潟県央支部 小泉 直喜

戦後 74 年が過ぎ、自分たちの世代でも戦争は「ずいぶん昔の話」と感じており、日々の生活の中では全く関係のないものとなっていました。

今回の研修では現地を訪れて、今も残されているガマ（鍾乳洞）や防空壕へ入り、語り部の言葉をじっくりと聞き、資料館で写真や遺品を目にしてきました。

語り部の言葉は、テレビや新聞に書かれる表面的なものではなく、心の叫びを聞き手に伝えるものでした。ガマの暗闇がいつそう心に響かせるものにしたようです。

資料の写真には幼い子供たちには衝撃的なものも多く、沖縄の市民が平和への意識が強い理由を感じました。

平和祈念公園では、6月23日の慰霊の日（沖縄終戦記念日）を前に鎮魂の祈りを捧げておられる方が多く、親族を戦争で失った悲しみは長い年月がたっても癒えないのだと考えさせられます。

「平和の礎」には新潟県・長野県出身の戦没者2千5百名以上の名が刻まれています。沖縄戦で亡くなった人だけでも、これだけの人数になるのだと、驚くばかりでしたが、毎年6月に合わせて追加の刻銘がされると知り、「ずいぶんと昔の話」などではなく、「今なお続いている」ものだと感じる事ができました。

今回の研修は、戦争の悲惨さを知り、平和のありがたさを改めて実感できるものとなりました。さらに若い世代にもこの研修を続けていただきたい。

そして世界平和を願います。



沖縄研修について思うこと

魚沼支部 庭野 澄夫

私が、沖縄を初めて知ったのは 50 年くらい前のテレビ番組かと思います。テレビで沖縄がでていて、母親から「沖縄は日本人が住んでいるけど戦争に負けて、アメリカが占領してるんだよ。」と聞かされた記憶があります。その二～三年後日本に復帰し、「日本の領土が増えるのだ。」と単純に喜んだ覚えがあり、いつかは沖縄県へ行ってみたいと思っていました。それが今回の研修で実現し、沖縄の戦争資料等を自分の目で直に見て、色々なものを感じ取ろうと思いました。

まず私が一番強い思いを感じた場所は「糸数アブチラガマ」です。そこは、自然の洞窟を陸軍病院として利用した所です。全長約 270



メートルの洞窟に 600 名ほどの軍人・看護婦・ひめゆり学徒がいたそうです。人が一人やっと通れるような急勾配の穴の入り口をくぐると、広い空間になりました。懐中電灯の光がなければ、深い暗闇です。外部の音も入らず、湿度も意外とあまり感じませんでした。女性ガイドの方が各部屋の状況を詳しく説明してくれました。

「この治療室では、麻酔かけず負傷兵の手足を切り、ひめゆり学徒が切った手足を片付けさせられました。最初の頃は卒倒した子も多いと聞きます。」

「何年か前に歯医者さんの団体が見学に来た時に、歯がいっぱい落ちている、それも若い方の歯が多いと指摘され、手分けして拾い供養しました。」

「ここに便所がありました。便所といっても桶があるだけで汚物を捨てにくいのも、ひめゆり学徒の役目です。足元が悪いので汚物をかぶった人も多いと聞きます。もちろん、水できれいにすることはできません。」

「天井が黒くなっているのは、米軍の火炎放射器で焼かれたススが残っているのです。」

置き去りにされた負傷兵が奇跡的に数名助かった方の顛末を聞きながら、その当手を想像してみました。

何百名の方が数か月も狭い環境で暮らしている。多数の負傷兵のうめき声や叫び声。たちこめる汚物の異臭。死体や切り取られた手足の処分。汚い飲み水や粗末な食料。まさに地獄とはこの事でしょう。

現在の私たちには、外に出れば空調の効いた車が待っていて、自動販売機では好きな飲み物がいつでも買え、おいしい食べ物もふんだんにあります。こんな恵まれた暮らしをしている私には、何ができるのでしょうか？何をすべきなのでしょう？やはり

戦争の悲惨さを家族や職場の仲間、友人知人に語りつぐ事が必要なのかなと思います。

第二次大戦、日本で唯一地上が行われ県民の4人に一人が亡くなり、今なお不発弾が残され、米軍の基地が狭い県内いたる所にある。戦争で命を落とした全ての方々のご冥福をお祈りするとともに、沖縄の過去と現状を特に若い人達に知ってもらうため、色々な機会を通じて訴えていこうと強く思います。



2019.6.24
旧海軍司令部壕



ニューリーダーセミナー「沖縄研修」レポート

魚沼支部 山内 由美

2年間のニューリーダーセミナーを終えて、総仕上げとして2019年6月22日～24日の3日間「沖縄研修」に参加をしてきました。

1日目は平和祈念公園、摩文仁ヶ丘、ひめゆりの塔の見学、2日目は佐喜真美術館、糸数壕の見学、平和行動への参加、最終日は旧海軍司令部、首里城の見学をさせていただきました。

「戦争」と聞くと広島や長崎といった印象があります。「ひめゆり隊」というのは何となく聞いたことがありましたが、沖縄戦については分からない事の方が多いです。研修に参加するまでは正直「慰霊の日」というのがあることも全く知りませんでした。さまざまな場所を見学してもらい、全てに共通していることは、戦争で



起こった事実を隠さずにありのままに伝えようとしていると感じました。思わず目をそむけたくくなるような、残酷で凄惨な写真や資料が数多くあり、生き残った方々の戦争体験を聞くと、本当にこんなことがあったのかと信じられない気持ちになります。

私にも娘が1人いるので、子供が犠牲になった対馬丸の事件や、「愛する者を自分の手で殺そう」と家族同士で殺しあう集団死というのは特に印象に残っています。学童疎開をさせた親は「どうか子どもだけでも助かってほしい」という一心だったかと思えますし、船に乗っていた子供たちは恐怖と絶望しかなかっただろうと思えます。子どもの泣き声で居場所が知られてしまうとの理由で、子どもを殺害したり母親に殺させたり等もあったと聞き、自分だったら本当に耐えられないと思えます。

ひめゆり平和資料館では、未成年の女学生たちが負傷兵の治療、糞尿や死体の処理、水汲みや飯あげ等、不眠不休でとても過酷な環境にいたという事を知りました。死の直前はお父さん、お母さんと叫んで死んでいったというのを聞き、想像を絶するような悲惨な状況だったのだと思えます。

戦争が終わり74年が経過した沖縄では、不発弾の処理や米軍基地の問題等、戦争被害が今でも続いていると聞き、解決していかなければいけない多くの課題を抱えているのだと感じました。

3日間の研修では足りないくらい、まだまだ私が知らない事実がたくさんあるのだと思えます。戦争を知らない時代に生きていられる事はとても幸せで、もう二度と戦争を繰り返さないために、自分たちに何ができるのか改めて考えたいと思えます。

沖縄研修への参加の機会を与えていただき本当にありがとうございました。

●平和記念公園・摩文仁の丘

そこは沖縄戦終焉の地であり、断崖絶壁ではありますが、美しい海岸線が望めるところでした。

公園内には沖縄戦の写真や遺品などを展示した平和記念資料館があり、そして沖縄戦でなくなられたすべての人々の指名を刻んだ平和のいしじ、摩文仁の丘の上には沖縄戦没者墓苑、沖縄戦に参加した各都道府県ごとの団体の慰霊塔が 50 基あるのを見学してきました。

●ひめゆりの塔・ひめゆり平和資料館

ひめゆりの愛称で親しまれていた沖縄師範学校女学部と県立第一高等女学校の生徒 222 名と教師 18 名合わせて 240 名が看護要員として南風原（はえばる）の沖縄陸軍病院に配属され、昼夜寝るまもなく負傷して運び込まれてくる兵隊さんたちの看護や水くみ、飯炊き、死体埋葬に追われていました。

青春まっただ中、娘盛りの女の子たちが死体埋葬の日々、そしていつ自分が死ぬのかという恐怖と隣り合わせの日々というのは想像を超えていて、考えれば考えるほど胸が苦しくなりました。

●佐喜真美術館

沖縄戦の図はよこ 4m 縦 8.5m もの大きな絵で、地上戦である沖縄戦を体験した方々の証言に基づき、その人々がモデルになって描かれたもの。この絵は地上戦を国内で唯一体験した沖縄の人々に沖縄戦のことを教えてもらいながら戦争で人間がどのように破壊されるかを描きそのことをしっかり見て、戦争をしない歴史を歩んでいってほしい、という作者の願いが込められています。

●糸数アブチラガマ

自然に出来た洞窟をガマというのですが、中は夏でも冬でも 20 度ですずしかったです。

沖縄戦が南下するにつれてひめゆり学徒隊が配属された南風原（はえばる）陸軍病院の分室として使われました。全長 270m のガマの中は 600 人以上の負傷兵で埋め尽くされ、兵隊とともにひめゆり学徒たちも糸数壕へやってきました。

ガイドの知念数子さんの話では、このガマには井戸があります。彼女たちはこの井戸を見つけると、泣き崩れたそうです。どこで生きて行くにも水は欠かせません。彼女たちが糸数壕にたどり着く前、水をくみに行くときは、行ってきますではなくさようならと言って出て行くそうです。そう言って水をくみに行き、帰ってきた者は一人も居なかったそうです。そとでは爆弾が雨あられと降ってくるからです。この井戸は

命の井戸と呼ばれているそうです。

沖縄に「命どう宝」という言葉があります。

いのちはたから

今の人たちのどれだけの人たちが命は宝だと思っているのか、死と隣り合わせのところで生きていた人たちだから命どう宝と言えるんだなと感じました。

●平和行動 IN 沖縄

慰霊の日なので全国の連合が参加していました。

「平和になってよかったね」ではなく、今が戦前とならぬよう、沖縄戦をより多くの人に知ってもらい、これからの日本を支えていく子供たちが安心して生きていける国にしていこうと言う思いを一致団結させる場でした。

●旧海軍司令部壕

ここは糸数壕とはちがい、人間が掘った地下壕です。

当時の弾痕が残っている部屋があったり、司令官室には司令官が血文字で書いた辞世の句が残されていました。



●首里城

けっこう長い距離だったのでゆっくり見ていられなくて、立ち止まることなく当時の資料や工芸品を見たので、建物はカラフルだなーという印象です。

城壁の曲線は死角を作らないため。緩やかなカーブは龍が動いているようにも見えて、美しかったです。

3日間あった沖縄研修でしたがあっという間でした。

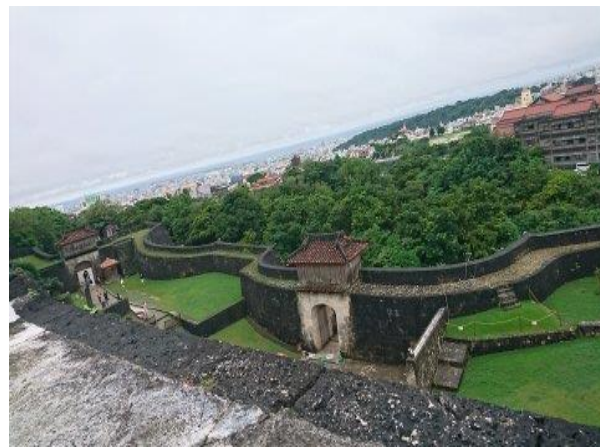
出発の時はうきうきわくわくしかなかったのに、まさかこんなにブルーな気持ちで泣いて帰ってくるとは思ってもいませんでした。

ですが、悲しく切ない沖縄戦を学ぶことが出来て私の心は少し成長しました。思いやり、手を差し伸べること、人とのつながり。8回のニューリーダーセミナーをともにした仲間たち、信越地本のみなさん、沖縄地本・各支部長のみなさん方と出会い交流を深めることで確実に私の仕事や組合活動に生きてきます。

とても有意義な研修でした。

夜は泡盛を手に、沖縄地本の方々とも交流が出来、楽しいひとときを過ごしました。

2019.6.24
首里城



沖縄地本の皆さんとの交流 ～ にふえーでーびたん ～



編集後記

沖縄といって思い描くのは、「白い砂浜」「エメラルドグリーンの海」「エキゾチックな建物」等々、日本有数の観光地のイメージでしょうか。私たちが研修で学んだ沖縄はどうでしょう。太平洋戦争時に米軍が日本本土を攻める前線基地として、唯一地上戦が行われ、きれいな海が多くの犠牲者の血で染まり、昭和47年（1972年）の本土復帰まで27年間にわたり米軍の施政権下におかれていたという沖縄の事実です。

日本軍の司令部があった首里城は戦渦により焼失、戦後に平和と繁栄の象徴として復元されてきましたが、昨年火災により再び焼失してしまいました。しかし、私たちが沖縄研修で感じた平和への願いは、あの美しい首里城の記憶とともに心に残っているのではないのでしょうか。

沖縄研修参加者の皆さんには歴史を風化させないため、皆さんが体験し感じたことを思い出し、仲間や次の世代へ伝えてほしい。今の社会や生活は先人が苦労を重ねて築いた「平和の礎」の上に成り立っているということを改めて考えてほしい。そんな思いを込め、研修から1年後の慰霊の日に合わせて、本レポート集を発行させていただきました。あることが当たり前ではなく、そのことに感謝し、繋いでいくことの重要性を感じながら、共に活動していきましょう。

2020年6月23日

ＪＰ労組信越地方本部
書記長 関川 武
(2017-2018年度教育部長)





OKINAWA

—— よみがえれ！首里城 ——

ニューリーダーセミナー 沖縄研修レポート

日本郵政グループ労働組合信越地方本部

